

第二の人生は波乱万丈

彩々

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ドラゴンクエストジョーカーだけをプレイしたオリ主がドラクエ5の世界に主人公であるリュカの双子の弟アベルとして転生した！

リメイク（DS）版を参考にしています

目次

転生	1
自覚	10
サンタローズの洞窟	18
アルカパ・レヌール城	25
不思議な青年と妖精	33

転生

「あー懐かしいな、これ。」

この春から社会人になる僕は一人暮らしの準備の一環で荷物を整理していた。

その時にもう何年も開いていなかったDSのカセットを見つけたのだ。

ドラゴンクエストモンスターズジョーカー（DQMJ）

母さんに進められて僕は初めてゲームをした思い出のカセットだ。

当時7歳の僕はただただ火力のある攻撃で攻めるだけでモンスターの耐性や

補助呪文についての知識があまりにもなかった。

その結果、2番目の島で全滅を繰り返す羽目になったのだ。

小学1年生の僕にトラウマを残し、途中であきらめ、しばらく別のゲームをしていた

時もあった。

だが、小学6年生の時にもう一度挑戦しやつとの思いでクリアした思い出に残るゲー

ムなのだ。

そんな懐かしいゲームを見つけた僕は久しぶりにゲームデータを起動させた。

ストーリーが好きでパーティから外さなかった神獣のキングスペーディオ、

ラスボスを討伐する前からパーティの要だったミルドラス、

裏ステージ攻略後に仲間になったエスターク……

その他にも、苦勞して仲間にしたモンスターが並んで居た。

夢中でデータを見てみると母さんが部屋に入ってきた。そして僕を見て一喝。

「ゲームするなら先に荷物をまとめなさい！」

ピシヤリとドアが閉められ、そのまま母さんは部屋を出ていった。

(タイミング悪すぎだろ！)

口に出して行ってしまえば制裁(今日の晩御飯無し)が下されるとわかっているため黙って荷物の整理を再開させた。

懐かしい気持ちにさせてくれたこのゲームも一人暮らしの住居に持つていくことにした。

それから数日後、無事に荷物の整理が終わり、これから住むアパートに運び込んだ。「これから社会人か。」

数日前に懐かしい思い出を振り返っていたこともあり、僕は少し緊張していた。

思春期になって素直になれない母さんとの会話を含んだ記憶は今の僕には少し苦いものだった。

アパートに引越しを終え、今日は家族そろっての引越し祝いの予定だ。

普段は口うるさいと思っていた親だが、直接顔を合わせることが少なくなるのは少し寂しく思った。

(今日は素直になつて感謝の言葉でも送つてみるか? ・ ・ 似合わないとか思われそうだな。)

結果的に言えば、それは失敗に終わった。

タイミングをうかがっていた僕に父さんから爆弾が投げ込まれたのだ。

「お前も社会人になつたら彼女とかできるのかな。学生の間は全くだつたからな ・ ・ 」
本当に悪気なく、ポロツとこぼれたような父さんの言葉に母さんが反応した。

「どうかしらねえ。この子はかなり口下手だからねえ、それにちよつと地味だし ・ ・ 」
これが僕の感謝の言葉を先送りになることが決定した瞬間だった。

さらに数日後、僕はアパートの周辺を見回ることにした。

職場から二駅離れたその地域は僕とは異なる会社に通う予定の学生も多く住んでいた。
た。

スーパーや惣菜屋、カフェに本屋などこれからお世話になりそうな場所を探しながら

歩いた。

そうしていると、僕はCDショップを見つけた。その店はCD以外にも様々な物を扱っており、

その中にゲームも含まれていた。僕はそこに足を踏み入れた。

RPGと書かれていた棚で見つけたのは少し前に見た懐かしのゲームとそのシリーズだ。

あいにく、僕は3DSを持っていないので、最新作は買うことができない。

少し古いシリーズの中からどれかを選ぶことにした。

その中で目を引いたのは『ドラゴンクエストV 天空の花嫁』だった。

僕がいくら未プレイとはいえ、ピアンカとフローラのどちらかを結婚相手として選ぶが、

どちらも人気が非常に高く、発売からかなりの年数が経っているにもかかわらず未だにどっち派かという、きのこことたけのこ論争にも負けず劣らずの議論が巻き起こっていること。

主人公が人質に取られ、父のパスが魔物に殺されてしまうことは知っている。

僕が知っているのはこれくらいなので、ネタバレを気にする必要はない。

モンスターズしかプレイしていない僕にとって、魔物と人間が戦うのは少し違和感が

あるのだが、

この作品の人氣ぶりに興味があつたのだ。

生活必需品以外で初めて購入するのがゲームとは社会人としてどうなのかだつて？

あーあーナニモキコエナイナニモキコエナイ・・・

僕は悪魔の声に従つてそのゲームを購入した。

良い買い物をした僕は上機嫌で帰り道を歩いていた。

信号待ちをしている僕のところに大型トラックが突つ込んでくるまでは・・・

今までに感じたことのない衝撃が身体を襲つた。感じたのは痛みではなく恐怖と後悔だつた。

(両親への感謝を先送りにしなければよかつた。一人暮らしを始めた途端に死ぬなんてこれ以上ない親不孝だろう。こんなバカで本当にごめん・・・)

いくつも言葉が浮かぶがそれらはすべて後悔だつた。

最後に目に入つたのはさつき購入したドラクエ5のカセットが入つた袋だつた。

気がつけば僕はベッドの上にいた。どうやら今まで眠つていたらしい。

身体は何の不自由もなく動かせる。意識の回復よりも身体の回復が速かったのだらう。

ナースコールをと思い、あたりを見回すと、知らない男性と子供がいた。

そして、地面が揺れていた。僕がしばらく混乱していると、男性が口を開いた。

「よく眠れたか、アベル？」

アベル？ 誰の事？ 一瞬そう思ったが男性は僕を見ているのだ。

この部屋にいるのは僕を含めた3人だけで、子供の方は眠っている。

この場面で声をかけられるのは僕しかない。

まさか、これって・・・異世界転生!?

それならばかなり重症だったであろうからだ。が不自由なく動かせることに納得でき
る。

そしてここが病院ではなさそうだということにもだ。

アベルこれが僕のこの世界の名前らしい。

ベッドから起き上がるとやけに視線が低い。身体がかなり小さくなっていったのだ。

子供になっていたのなら、これはもう確定だろう。

僕の名前はアベル、よし、受け入れた！

「・・・うん！」

今までのアベルの口調がわからなかったので返事はかなり短くなった。

「そうか、それは良かった。」

ガハハと笑う豪快な人が僕の父なのだということをとなく僕は理解した。

返事に間があつたが、寝起きということもあつて不思議に思われたりはしていなさそうだ。

「リュカもそろそろ起きなさい。」

隣で寝ていた男の子はリュカというらしい。

リュカが父さんに起こされてる間に僕はアベルとしての記憶があることを確認していた。

どうやらもともと口数の多い子供ではなかったらしい。

僕の元の性格とほとんど同じらしく、この体に生まれ変わったと考えてよさそうだ。

どうやら僕は船に乗っていたようで、今日の昼頃に僕たちは上陸予定らしい。

「朝ごはんを食べ終わったらお世話になった船員の人たちにあいさつしてきなさい。」

父さんにそう言われた僕とリュカは船内を歩き回り、出会った人たちにあいさつを済ませた。

その時にリュカがダンスを勝手に開けたり樽を壊したりして中の道具を持ち出して
いた。

もちろん僕は止めた。だが、リユカはニコニコしながら

「おじさんたちが勝手に持つて行っていいって言ってたよ。」

とさも当然のことにように言い放ったのだ。

「樽とか壊していいって言ってたか？」

「え？言っていないけどそうしないと取れないもん。」

ええ・・・この子の将来が早くも心配です。

僕たちが挨拶を終えたところで、船が港に到着したようだ。

船長がパパスを呼んで来いと言っていた。

それが父さんの名前だとわかったので僕たちは父さん呼びに行つた。

この時僕はパパスって確かドラクエ5の主人公の父の名前だよなとぼんやりと考えていた。

アベルはパパスの名前を知っているても容姿は知らなかったのだ。

その考えが大当たりだとは気づかずに・・・

さらに言えば、リユカがダンスや樽、瓶の中身を勝手に持ち去ることが勇者行為と呼ばれるものだとは知らなかった。

DQMJでは道具は買うか宝箱、もしくは倒した魔物が落とすかという入手方法しか

なかつた。

アベルがドラクエの世界にいることに気付くまであとわずか……

さらにそれがVだと気付くまでは……もうしばらく！

自覚

船が港に着いた。そこで待つていたのは恰幅の良い男性と二人の女の子だった。

男性の名はルドマンというらしく、父と知り合いでこの船を貸し出した張本人らしい。

この規模の船を知り合いとは言え気軽に貸し出せるとは……かなりの金持ちのようだ。

確かに来ている服も高価そうなものだった。

すると……どいてよ！と黒髪の女の子が父さんを突き飛ばして船に乗り込んだ。ルドマンさんはわがままな娘で困ったものだため息をついていた。

一方、青髪の女の子は引つ込み思案なのか船に乗り込むことを怖がっているようだ。

「大丈夫、怖くないよ。」

僕はそんな女の子に声をかけていた。

どうやら父さんも声をかけようとしていたらしいが僕の方が少しだけ早かった。

父さんは少し僕たちを見守ることにしたようだ。

そんなこと言われても怖いものは怖いのだ。

少し涙目になった女の子の表情は言葉にされなくてもわかりやすかった。えええ、何も考えずに声をかけたがここからどうすれば良いかわからない。

元の体だったなら支えること負うことも簡単だった。

しかし、子供の体ではそこまでの力はない。どうしよう・・・

父さんに助けを求めて視線を送った。

「ワハハ。ではお嬢さん、手に捕まってください。」

父さんが僕のSOSを拾って青髪の女の子に声をかけた。

恐る恐るといった様子で父さんに捕まった女の子の手を引き、あっさりと船に乗せてしまった。

ああ、なんか悔しい。主に最初に父さんが、僕が出したSOSに笑ったあたりが。悔しがる僕に大人たちの微笑ましいものを見るような表情が突き刺さる。

いたたまれなくなった僕は船を降りた。

リユカはさっきの女の子たちが気になるようで、女の子たちが入った部屋に向かっていった。

僕にはそれを気にする余裕はなかった。

船から降りると地面の揺れもなくなり少し安心する。

船上よりも重力がかかる感覚がより一層その感情を強くするのだ。

大人たちと少し離れたところで座って待っていると、父さんとリュカが船から降りてきた。

だが、父さんは港の人とまた話を始めてしまった。

船を見送り、やることなくなくなった僕たちは適当に過ごしていた。するとリュカが、「ねえ、ちよつと向こうに行ってみようよ。」

と僕が返事をする前にさっさと歩いて行ってしまった。

実は。パパスと子供たちは

「(魔物が出てきて危険だから) あまり遠くに行くんじゃないぞ。」

「(子供が目の届かないところにいるのは不安だよね。) うん、わかった。」

「はい。」

というやり取りをしていたのだ。

リュカは特に深くは考えていなかったが、パパスとアベルの間には大きな食い違いが生じていた。

魔物がいるということを知らないアベルは自分が見張っていれば良いかと

あまり深く考えずにリュカについてきてしまった。

しばらく歩いていくと、僕たちの目の前に青いゼリー状の生き物が立ちふさがった。

見覚えのあるその姿はどう見てもスライム・・・魔物だった。

僕がいるのはドラクエの世界だ！僕がどんな世界に転生したのか自覚したところで

3匹のスライムは一斉に僕たちに襲い掛かってきた。

僕たちでスライムを一匹倒したところに父さんが駆け付け、残りのスライムを倒してしまつた。

スライムとは言え僕たちが二人がかりで一匹倒した魔物を一瞬で倒した父さんはかなり強い。

リュカもキラキラした目で父さんを見つめている。

「大丈夫か、リュカ、アベル。」

父さんは僕たちのけがを確認するとホイミを唱えて回復してくれた。

そこからはパパスが先頭に立ってサンタローズという村を目指して歩いていった。

途中で現れた魔物たちも僕たちが手を出す暇なく父さんが倒してくれた。

日が暮れる前に無事に僕たちはサンタローズにたどり着いた。

父さんはこの村でかなり慕われているらしい。

門番が父さんの帰りを知らせると、村人たちは次々に声をかけていた。

さらに僕たちの家からは父さんの従者が表れた。

「うっうっ・・・坊ちゃんたちも大きくなって・・・」

このサンチョという人物はかなりの感動屋のようだ。

サンチョに促されるままに家に入ると、そこには二人の母娘がいた。

母親の名前はわからなかったが、女の子の方はビアンカというそうだ。

数年前に僕たちはあったことがあるそうだが、残念ながら僕たちの記憶になかった。

パスといいいビアンカといい、ドラクエVの登場人物と同じ名前だな・・・

ここがドラクエの世界であることはわかったが、ここがVの世界なのかそうじゃないのか、

たとえVの世界だったとしても果たして双子の弟が登場人物に出ていたか、

仮に僕が部外者となった時に僕の影響はどこまであるのか・・・

僕が前世、最後の記憶はVのカセットを買ったところなのだ。

その記憶と僕が転生したことに因果関係があるのならば十中八九ここはVの世界だ。

・・・ということは、この予想が正しいのであれば、父さんが殺されてしまう！

だが、ストーリーがわからない僕にはそれがいつ起こるのかわからない。

そして、そうなってしまった時に自分はいったいどうなってしまうのか。

僕は自分の命もかなり危険な状況にいることがわかった。

とにかく今は強くなるくらいしか方法がない。

見捨てて逃げるといふことはできない。

父さんは僕に疑いようもなく家族の愛情を注いでくれているのだ。転生を自覚してからあまり経っていないとはいえ、恩義はすでにある。

『父さんと肩を並べられるくらいに強くなろう』

これが経った今できたこの世界の僕の目標である。

父さんの具体的な強さはわかっていないのだが、転生前の記憶を振り返っても、パパス以上の強さを持つ人間にはまだあつたことがない。

目標の高さがわからぬままに決めたが、頑張ってみようと思つた。

ビアンカが本の読み聞かせをしてくれていたらしいが僕は上の空だつた。

難しい字が読めなかつたらしく、僕がその場面をよく見ていなかったことは幸いだが、

「聞いていなかった。」と言われるのも微妙らしい。少し怒らせてしまった。

年下の僕たちにお姉さんぶってくるのを微笑ましく思うだけだ。

まあ、幼女と言つても良い年齢の子に年下扱いされるのは思うことがあるのだが、それは僕が特殊なだけだ。

大人の会話が終わり、ビアンカ母娘は宿に戻つた。

僕たちも晩御飯を食べ終えるとサンチョに促されて2階のベッドに移動した。

明日からどうにか鍛える方法はないかと僕は考えているうちに眠りについていた。子供の体は夜更かしには耐えられなさそうだな。まずは体力からだな……

宿に戻った母娘の会話

「そんなに考え込んでどうかしたのかい？ ピアンカ。」

「お母さん。今日リュカとアベルに本を読んであげようと思ったんだけどね、

わからない字がいっぱいあって全然読めなかったの。」

「そうなのかい。うちに帰ったら勉強でもするかい？」

「うん。リュカはお話を聞こうとしてくれてたんだけど、

アベルは全然聞いてくれなくて悔しかったの！ 賢くなってびっくりさせてやるんだから！」

「おやおや、そんなに夢中になって……アベル君その子に恋でもしてるのかい？」

「そんなわけないじゃない！ それに、話を聞いてくれたのはリュカの方なんだから。」

「ほう、じゃあピアンカはリュカ君に恋……」

「それも違うから〜!!」

ビアンカ^娘の反応を見て楽しむ母の姿があった。

精いっぱい否定をしているようだが、本気で嫌がつているわけではないとわかるのだ。

無意識だろうが彼の名前が出ると、に大きな反応を見せていたのだ。

クスクスと笑いながらも、その視線からは母親としての愛情があふれていた。

（娘が成長しているのはうれしいし良いことなんだけど、

子離れしなきゃいけない日は案外近いかもねえ・・・）

「お母さん、急に黙っちゃってどうしたの？」

母の雰囲気が変わったのかビアンカは不思議そうに聞いた。

「何でもないよ、ビアンカ。晩御飯食べなきゃねえ。

ビアンカはどれがいいかい？」

ムムム、納得はしていないが仕方ない。

「じゃあこれが良い。」と活発な性格の彼女らしく一つのメニューを選んだ。

（フッフ、私たちの可愛い娘だ。そう簡単にはくれてやらないぞ、〇〇君。）

サンタローズの洞窟

自分がかかなり危険な状況にいることを悟ったアベルは強くなることを決意した。

その翌日、リュカと僕はサンタローズの村内を探検すると行って家を出た。

好奇心の塊のようなリュカは一緒に家を出たにもかかわらず僕を置いて先に進んでしまう。

「探検しようよ。」と言って僕を誘ったのはリュカの方なのだ。

僕が村人たちと話しているうちにリュカは目の届かないところに行ってしまった。

精神年齢は僕の方が圧倒的に上なので微笑ましくらいなのだが、

「恋人相手にそれやると怒られるぞ！」と心の中では忠告している。

村中を探し回っているとリュカが洞窟の中に入っていくところだった。

村の中にある洞窟なのでそれほど危険ではないのかもしれない。

だが、子供一人で行くのはダメだろうと僕はリュカの後を追って入っていった。

前言撤回

なんと洞窟内には魔物がいた。洞窟とは言え村の中なのだ。

あまり強くないとはいえ、次から次へと魔物が襲い掛かってくるのだ。

前方でもリュカがスライムやせみもぐらに囲まれている。

ひのきの棒で魔物たちを倒しながらリュカの近くへと進んでいく。

僕は前世の記憶がある分、思考力・判断力は大人並みだ。

先に倒せそうな魔物や襲い掛かってきそうな魔物への対処を素早くとることができている。

だが、正真正銘の子供であるリュカはそこまで思考は発達していない。

近くにいる魔物を順番に攻撃しているようで必要以上に攻撃されていた。

「ホイミン」

僕はリュカのそばに行き、回復呪文を唱えた。そしてそのまま戦闘に加わった。

side:リュカ

僕が村の中を探検していると、村の奥に洞窟を見つけた。

ワクワクしてその洞窟に入っていくと、スライムが僕に体当たりしてきた。

「わっ！」

僕はびっくりしたけど避けることができた。

僕はそのままスライムとの戦いを始めた。

スライム一匹だけならそれほど強くはない。僕が2回たたくと勝てた。

でも、魔物は一匹じゃない。少し歩けばすぐに見つかって攻撃される。

何回か魔物たちと戦っているうちに僕はたくさんの魔物に囲まれていた。

近づいてくる魔物たちをひのきの棒で叩く。

でも、だんだんと疲れてきて身体が重くなったところで僕は転んでしまった。

せみもぐらに足が引つかかってしまったのだ。

転んだ僕にいつせいに攻撃を仕掛けてきた。

急いで立ち上がり、避けようとしても、魔物の数が多すぎて躲しきれない。

魔物たちの攻撃が当たるようになってきた。僕はそれでも戦うしかない。

「ホイミン」

必死で魔物たちの攻撃をしのいでいると、アベルが来てくれた。

MPや薬草がなくなって回復できなかつたのですごく助かった。

そのままアベルと一緒に魔物たちと戦った。

レベルはほとんど同じなのにアベルの方が強かった。

お父さんがいてくれる時のような安心感があつて戦いに集中できた。

魔物たちを倒し切り、僕たちは洞窟の外に出た。

side：アベル

「ほとんど魔物との戦闘経験がないのに何で単独で魔物に囲まれてるんだ!!」

洞窟を出した後僕はリュカを叱っていた。

確かに僕も村の中に魔物が住む場所があるとは思っていなかった。

自分で分かっていたいなかったことで叱るのは少し理不尽だとは思うが言わずにはいられなかった。

リュカは僕がここまでの大声で起こるとは思っていなかったらしく、ビクツと肩を震わせた。

「はあ、よかった…」

自分の兄（精神年齢的にはかなり年の離れた弟）が魔物に殺されるかもしれない光景が

目の前で起こっていたこの恐怖感・・・

「アベル、助けてくれてありがとう。」

「無事でよかったよ。」

純粹だからこそその心からの笑顔。この世界の兄は可愛いです。

だが、あの洞窟にはスライムがいた。数が多かったとはいえず、最弱の魔物スライムと

それに近い実力しかない魔物に苦戦するような実力ではヤバイ。

この出来事は魔物の恐ろしさとこの世界で強さが生きていく上で

どれほど重要なのかを身をもって教えてくれた。

(しばらくあの洞窟内で戦いの訓練をした方が良いな。)

考え事をしていた僕にリュカが言った。

「ねえ、アベル。この洞窟に葉屋のおじさんが入って行ってまだ戻ってきていないんだ
！」

おじさんが中で魔物に襲われているかもしれないから助けたい。

お願い、アベル。おじさんを助けるの、手伝って。」

赤の他人をここまで思いやれるのか。本当にやさしいなりリュカは。

少なくとも洞窟の1階にはそのおじさんはいなかった。

助けるためにはさらに奥に行かなければならない。

魔物に襲われる恐怖を経験しても諦めずに助けに行こうとするのか。

ここで僕が見捨てるわけにはいかないだろう。それに、僕たちも強くならなきゃね。

「そういうことなら、すぐに行こうか。」

「うん！」

体力を回復させ、MP切れした時のために薬草を購入した後、僕たちはもう一度洞窟に向かった。

洞窟の奥にはさらに多くの魔物がいた。

ドラキーは素早いし、おおきづちはたまにすごいパワーで攻撃してきた。

だが、僕たちは戦闘経験を得るごとに成長していき、洞窟内の魔物であれば、

一人でも3匹くらいなら余裕で倒せるようになった。

宝箱の中身を回収しつつ地下に進んでいくと、例のおじさんが岩の下敷きになっていた。

僕たちはおじさんを押さえつけていた岩を動かし、おじさんの足にホイミをかけた。

動けるようになったおじさんは礼を言った後、急いで洞窟から出ていった。

僕たちも後を追って洞窟を出た。

「おじさんが見つかってよかったね、アベル。」

「そうだね。リュカがいなかったらずっと岩の下敷きになってたね。」

「アベルも一緒に行つたじゃん。」

「それでもリュカが言ってくれなかったら僕は知らないままだったよ。」

「お父さんやサンチョもほめてくれるかな？」

「飛び切りのシチューを作ってくれるかもね。」

なお、晩御飯のタイミングで報告したら、褒めてはくれたが、

「洞窟に入る前に大人にも相談しなさい！」と注意された。

確かにその通りだ。戦闘経験を積むことも大人たちがついてくれるところでやった方が安全だ。

少し視野が狭くなっていたようだと僕はひそかに反省した。

翌日、ビアンカ母娘がビアンカの父、ダンカンさんの薬が手に入ったと言って、

彼女たちが住むアルカパの村に帰る。その護衛として父さんと3人でついていくことになった。

昨日助けたおじさんに薬を頼んだのは彼女たちだったらしい。

リュカはそれを知っていたらしい。というか、おじさんが帰っていないことを聞いたのはビアンカのお母さんからだそう。そういうことは先に言いなさい。

サンタローズの村を出る直前に僕がしたことはリュカへの言い聞かせだった。

アルカパ・レヌール城

ビアンカ母娘をアルカパまで送り届けた僕は親同士の会話を聞いていても面白くないと言った

リユカとビアンカに連れられ、宿屋の外に出た。

町の出入り口には衛兵がいたので二人が町の外に出る心配はないだろう。

だが、この二人の行動力はよくわかってるので何かと心配なのだ。

ビアンカの案内に従ってついていくと二人の男の子がネコをいじめていた。

そのネコはどう見ても魔物だ。二人組の男の子も、リユカもビアンカもそれに気づいていない。

「ちよつと、止めてあげなさいよ！かわいそうでしょ！」

ビアンカはさっそくその正義感を發揮し男の子たちを怒った。そのまま勢いに任せ
て話が進み、

僕たちはそのネコベビーバンサーを救うため、レヌール城に住むお化けを退治することになった。

(僕たち、たぶん今日はこのまま帰ると思うんだけど・・・忘れてるよね)

怒りが収まらないと言った様子の二人が宿屋に帰って行くのを二人を見ながら

僕はこれからどうするべきか悩んでいた。

結果から言えば、今日一日はビアンカのお母さん宿屋のおかみさんの好意で泊っていくことになった。

部屋に通される途中でビアンカが夜に僕たちを迎えに行くと言って、

体力温存のために先に寝ておくことを提案された。

さすがに子供の体で徹夜には耐えれないと判断し、僕も特に逆らわずに頷いた。

子供二人だけで魔物が活発になる夜に町の外に行かせるわけにはいかないし気合を入れた。

その夜、僕が目を覚ましたと同時に、部屋の扉が開いた。

約束通りにビアンカが僕たちを起こしに来たのだ。

ビアンカがそのままリュカを起こし、僕たちは物音をたてないようにひっそりと外に出た。

町の出入り口を守る衛兵はビアンカの事前情報通りに眠っている。

横を素通りしながら僕は内心腹を立てていた。

(こいつ・・・給料もらって仕事してるんならまじめにやれよ。

四六時中気を張つてるとは言わないけど、せめて寝るなよ・・・

まあ、これがゲームのご都合主義ってやつなのか僕たちは助かってるけど。)

僕たちはレヌール城を目指して北へと進んで行ったつもりだった。

だが、予想以上に魔物が多く、倒しながら、逃げながら歩き回っているうちに、方角がわからなくなってしまったのだ。それでもリユカとビアンカは進もうとしていた。

明日には僕とリユカが帰ってしまうので、何としても今日中に解決したいのだ。

そのことを僕もわかっているため、止められないのだ。

焦ったりユカとビアンカは走って少しでも距離を稼ごうとしていた。

だが、子供の少ない体力でその方法はあまり適していない。案の定すぐに疲れれてしまっていた。

仕方がないと僕たちは少しの間休憩をはさんだ。冷静になってあたりを見回すと、

木々のさらに奥、かすかに城が見えた。

「向こうに城が見えたよ！多分あれがレヌール城だ!!」

僕が指をさした方向にリユカとビアンカは進んでいった。

だが、タイムリミットが迫ってきているのだ。残念だが城の中を見て回る時間はないだろう。

レヌール城全体が見える距離に來たところで、僕たちはアルカパに帰ることにした。

こっそりとベッドに戻ってから数時間後、僕は目が覚めた。

昼間に眠っておいたからか少ない睡眠時間でも全く眠たくなかった。だが、普段よりも目覚めた時間は遅かった。

(いつもならば父さんに起こされるのにな．．．)

不思議に思っただけでみると、父さんの顔色が悪く熱があった。

ダンカンさんの風邪がうつってしまったようだ。

急いで階段を降りて女将さんに助けを求めた。

薬草をすりつぶしたり、濡れたタオルを額に置いたりするうちに、リュカと父さんも目が覚めた。

「旦那の風邪がうつったみたいだね。治るまでゆっくりしていきな。」

「申し訳ない。葉やタオルなど感謝する。」

「気にすることはないよ。それに、半分くらいはアベルがやってくれたしね。」

「そうなのか。ありがとうアベル。」

「いいよ、早く治してね。」

あの頑丈なパパス（父さん）が風邪をひくなんてことは全く想像していなかった女将さんや僕。

少し慌ててしまったが何とか落ち着いていた。

父さんが風邪をひいたことにはリュカやダンカンさん、ピアノカも驚いていた。

風邪が移ってはいけなと、僕たちは午前中は宿屋の外にいろように言われてしまつた。

看病も女将さんに任せて僕たち子ども3人は作戦会議だ。

とは言つても昨日の帰り道はしつかりと覚えてるのでその逆を行くだけだ。

今日も行動は夜なので、昼食後は夜に備えて寝ることにした。

夜、ピアンカがドアを開ける音で僕は目が覚めた。

リュカを起こした僕たちは昨日と同様に町の外に出た。

このあたりにどんな魔物が住んでいるのかが分かつていたので、対処も簡単にできた。

夜の道にも慣れて、警戒しながらも話しながらレヌール城に向かった。

レヌール城の正面入り口は何らかの魔術が施されているらしく、入ることができなかった。

だが、城の裏には梯子があり、そこから城の中に入ることができた。

城の中では様々なことが起こった。ピアンカがさらわれたり、屋上のお墓にはなぜか僕たちの名前が刻まれていたり、王様から住み着いた魔物を追い払うという依頼を受けたり、うごくせきぞうとの戦闘に予想以上に体力を奪われたり・・・

一つの城の中で、一晩で起こる出来事としては濃すぎることが次から次へと・・・階段を下りたり、部屋を歩き来して見つけた扉を開くと来た時には入れなかつた正面入り口に立っていた。鍵を開けて戻り、すぐそばの階段を上ると人魂が宿屋をやつてた。

少しの間休憩しようと目をつむり、体力を回復させると、なぜか城の外にいた。

急いで現在地を確認し、城へと戻つた。

不思議なことに宿屋に入ってからあまり時間が経っていないにもかかわらず、体力が全快し、

まるで一晩眠つた後のような感覚があつたのだ。

首をかしげながらも城の中を探索し松明や名産品の銀のティーセットをそろえて最後にボスのいる4階にたどり着いた。

ボスは僕たちを見ると、いきなり床のトラップを作動させ、僕たちを下に落としたり。調味料を振りかけられて、一つフロアが上がると、おぼけキャンドルに囲まれていた。リユカのブーメランで攪乱しながら僕が近接攻撃を仕掛けて勝利した。

ピアンカはマヌーサや薬草を使ってサポートしてくれた。

もう一度4階に上がると場所を変えてレヌール城の魔物のボス：おやぶんゴーストがいた。

おやぶんゴーストとの戦闘もさつきまでとあまり変わらない。

むしろ一体であったりビアンカのメラが効くだけ戦略上は戦いやすい。

ギラやメラも今までの魔物やビアンカの呪文を見てきたおかげで対応しやすかった。

体力が多く、かなりの時間がかかったが、僕の攻撃で戦意が喪失させた。

無事にレヌール城の魔物を追い払い、王に会いに行くと感謝を告げられた。

そして、未練のなくなった王と王女が成仏した。

その姿を見届けると空から金色の珠が降ってきた。

ビアンカはそれを王様からのお礼と解釈し、冒険の宝物として持つて帰ることになった。

キメラの翼でアルカパに帰ると、夜が明けていた。

約束通りに男の子二人組からネコ（ベビーパンサー）を開放した。

親が宿屋をやっているビアンカは動物を飼うことはできないと

ボロンゴと名付けられたベビーパンサーは僕たちと暮らすことになった。

僕たち3人と一匹で宿屋に帰ると扉の前には父さんやビアンカの両親が勢ぞろいだった。

軽いお説教と勇氣ある行動だとお褒めの言葉をいただきいた後、

僕たちはビアンカ親子と別れを済ませた。

その時にビアンカはボロンゴに思い出のリボンを結んでくれた。

「また冒険しようね。」という約束の印でもある。

「それじゃあまたね。」

僕たち親子3人はサンタローズの村に帰って行った。

不思議な青年と妖精

ビアンカと別れた後、サンタローズの村に帰ってきた。

父さんからは子供だけで危険なことをしないようにと叱られた。

サンチョの前で話題に出さなかったおかげでお叱りはその一言だけで済んだ。

心配をかけたことはちゃんと誤っておいた。

父さんは僕たちがボロンゴ（ベビーパンサー）と普通に接しているのを見て、何かを想っているような表情をしていた。父さんであればボロンゴが魔物であることくらいはわかるはずだ。それなのにボロンゴが僕たちといることに不安を抱いていないことが不思議だった。

正直、反対されることも考えていたのだ。ボロンゴを普通に受け入れることが、あの遠くを見るような表情と関係があるのだろうか・・・

家に帰ってきて、サンチョが用意してくれたご飯を食べると、リュカと僕はすぐに眠ってしまった。故郷に帰ってきたという安心感があったのだ。この世界に転生した

ことを自覚したのは最近だというのに……どうやら僕はドラゴンクエストの世界に順応してきたようだ。

翌朝、僕は少し早くに目を覚ました。

もう春だというのに寒さで目覚めるのはあまり気分が良くない。天気は人間が干渉できるものではないので仕方がないのだが、そろそろ気温が上がらなければ、今年の農作物の収穫が大きく減少してしまうそうだ。

しばらく経つと、他のみんなも起きてきた。朝食を食べてリュカは村へ探検に、僕はサンチョと勉強にそれぞれ分かれた。文字は幸い、元の世界と同じなので、この世界の地理や歴史について教えてもらうのだ。リュカは子供らしく？勉強は好きではないようだ。

午前中に今日の勉強が終了し、帰ってきたリュカと昼食を食べている途中、村人たちが小さくないずらを受けているという話をしてきた。

そういえばサンチョもまな板がないと言っていた。それは後からサンチョ自身が片付けた記憶のないところから出てきたのだが、同じようなことが村全体で起こっていたようだ。リュカはもう一度話を聞いてみるようなので、僕もついていくことにした。

リュカが言っていたことは本当のようだ。物が隠されたり、落書きされたりと様々な

被害に遭っているようだ。

だが、みんな誰がやったのかはわからないようだ。冗談交じりに僕たちがやったのか問いかけてくる人もいたが、みんな僕たちではないとわかってくれていているようで、同じことが続くと面倒だと思っていることがうかがえた。

宿屋の地下の酒場に場違いな少女が座っていた。不思議なことに、僕たち以外は誰もその少女に気が付いていないようだ。リュカが話しかけるとその少女は自分の姿が見える人がいることに驚いたようだ。少女の名前はベラというそうだ。どうやらベラは人間に頼みがあったのだが、誰にも自分を見つけてもらえなかったようで、自分が気づいてもらえらるようにならずに仕掛けたそうだ。この村で起こっているいたずらはすべて彼女の手によるものだったのだ。幸い、壊れたり、なくなったりしたものはなかった。僕たちは（勝手に）許すことにした。

その少女の頼み事を聞くために、僕たちは人があまり来ない地下室のある家、つまり僕たちの家で待ち合わせることにした。

家に帰る途中、サンタローズの村では見たことのない青年がいた。彼は僕たちに気が付くと話しかけてきた。

「やあ、坊やたち。」

「こんにちは、お兄さん。お兄さんはこの村の人じゃないよね。何しているの?」

リユカは初対面にもかかわらず、会話を続けている。さすがのコミユカだ。

だが、こうして二人が並んで居るのを見てみると、とても似ているのだ。彼らがまとう雰囲気やまっすぐな瞳がとても似ているし、ターバンも同じ色の物を使っている。まるでリユカが成長したらこうなるという見本を見せられている気分だ。だが、いくら呪文がある世界とはいえ、未来から過去へ渡るといえることができるとは思えない。

思考が中断したところで改めて二人を見ると、リユカが金色の珠を旅人に見せていた。旅人はそれを受け取り、様々な角度から見た後、リユカに返していた。

「いいものを見せてもらったよ。ありがとう、坊や。君たちは兄弟かな?」

「うん、そうだよ。僕がお兄ちゃんなんだ!」

「どうも。弟のアベルです。」

「あつ、名前を言っていないかったね。僕はリユカだよ。」

「お兄ちゃんのリユカ君と弟のアベル君だね。」

「お兄さんの名前は?」

「僕の名前は理由あつて教えられないんだ。」

そろそろ僕は行かなければならない。

リユカ君にアベル君、家族を、お父さんを大切にするんだよ。」

彼の最後の言葉は実感がこもったような重い言葉だった。

その後、僕たちは家の地下室で、ベラの頼みごとを聞き、妖精の世界へ向かうことになった。

話の途中に父さんが地下室に来たのだが、やはり父さんにも、ベラの姿は見えていなかった。

大人には妖精の姿は見えないということが確信できた。

ベラが祈りをささげると地下室に光の階段が造られた。

僕たちはその幻想的な階段を昇り、妖精の世界へ足を踏み入れた。